

## 読本における「あて字」の発生と伝播について

銭谷 真人 (教育学科)

### On the Occurrence and Propagation of the “ateji” in the *yomihon*

Masato Zeniya

Department of Education, Kamakura Women's University

#### Abstract

In this paper, I sought the roots of the *ateji* found in the *ninjobon* in the *yomihon*. Using the Corpus of Historical Japanese, I investigated whether some of the *ateji* found in the *yomihon* of Akinari Ueda and Bakin Kyokutei were transmitted to the *ninjobon* and the modern literature. I also examined whether these *ateji* originated in the *yomihon*. Using the *Nihon Kokugo Daijiten* I investigated whether there were any examples of usage before the *yomihon*. I found that a part of the *ateji* was not found in any old dictionaries before the *yomihon*, but was found in the *sharebon* and *ninjobon* in the Edo period, and in the magazine “*Taiyo*” in the modern period. In particular, it is highly likely that the *ateji* derived from the vernacular Chinese occurred in the *yomihon*.

I infer some *ateji* have been used in the same way as *jukujikun*.

Key words: *ateji*, *yomihon*, the Corpus of Historical Japanese, vernacular Chinese, writing system

キーワード：あて字、読本、日本語歴史コーパス、白話語彙、書記原理

#### 1、はじめに

字音や字訓に基づかない漢字表記を「あて字」<sup>1)</sup>とすると、近世の戯作には多種多様な「あて字」が見受けられる。出版を前提とした戯作においては、大部分の漢字に振り仮名が付されており、語に対して自由に漢字をあてることが、ある程度許容されていたのである。それらの「あて字」は戯作者の創作であり、臨時的なものであったのか。前回の調査<sup>2)</sup>においては、近世の戯作の一ジャンルである人情本に見られる「あて字」が、近代に伝播し、中には熟字訓<sup>3)</sup>のように用いられてい

たものがあつたことを指摘した。

その一方で、人情本に見られた「あて字」は、そのルーツである洒落本にはあまり見られないということがあつた。これは人情本において「あて字」が発生したというようにも考えられるが、他の可能性も考えられる。それは人情本のもう一つのルーツと言われている読本から伝播した<sup>4)</sup>という可能性である。

本稿においては、読本に見られる「あて字」は人情本ひいては近代の作品においても見られるのか、日本語歴史コーパス（以下 CHJ）を用いて検証していきたい。なお読本に見られる「あて字」

もまた、必ずしも読本において発生したとは限らない。近世以前より用いられてきた可能性も考えられる。それについては、『日本国語大辞典 第二版』(以下『日国』)<sup>5)</sup>の表記欄を参照する。近世以前の古辞書類に記載があれば、読本の作者もまた先行する文献に倣って「あて字」を使用したということになる。

なお読本で使用する漢字表記については、白話語彙(近世中国口語文学語彙)<sup>6)</sup>からの影響が指摘されている。<sup>7)</sup> 白話語彙と「あて字」の関連性についても考察していきたい。

また読本から人情本に継承され、近代へと伝播していったのであれば、その「あて字」は熟字訓のように用いられていた可能性も考えられる。そのことについても検証してみたい。

## 2、検証方法について

今回の検証では前期読本の代表作である上田秋成『雨月物語』(1776、以下『雨月』)と、後期読本の代表作である曲亭馬琴の『高尾船字文』(1796、以下『高尾』)『小説比翼文』(1804、以下『比翼』)をテキストとして用いた。<sup>8)</sup> 『雨月物語』は短編ごとに異なる語が見られ、語彙が豊富である。『高尾船字文』は、馬琴の読本の最初の作品であり、初期から「あて字」が見られたのかを確かめなかった。『小説比翼文』は遊里や恋愛を題材としていて、人情本と共通する語彙に期待した。

以上の作品の中から、漢字の音訓に基づかない読み方で振り仮名が付されている二字熟語を、「あて字」として取り上げる。なお参考のため、現行の表記に対して借音、借訓と思われる例も一部扱っている(「深切(しんせつ)」など)。

また以下のようなものは調査対象外とした。

- ①常用漢字表に記載されているもの(現在でも熟字訓として通用しているもの)。<sup>9)</sup>
- ②指示詞や疑問詞に類するもの(現在通常平仮名で表記するもの)。
- ③漢字列または読みが複数短単位となるもの(コーパス検索アプリケーション「中納言」において、「書字形出現形」で検索できない

もの)。

なお③については、複数短単位であっても、その中から二字熟語が切り出せるものについては、対象とした(「蒙汗薬(しびれくすり)」から「蒙汗(しびれ)」を切り出すなど)。

以上のように選別した調査対象を、まずは『日国』で検索する。その際には「読み(振り仮名)」の方を用いる(「光景(ありさま)」であれば「ありさま」で検索)。「日国」における表記欄において、その表記の例が見られるかを確認する。ない場合は用例も参考にする。

次に「中納言」でCHJから用例を探す。<sup>10)</sup> 人情本に見られる「あて字」の漢字列(「光景(ありさま)」であれば「光景」)を書字形出現形で検索する。その際には旧字体も併せて検索する(「女兒(むすめ)」であれば「女兒」でも検索)。検索対象は「洒落本」「人情本」「『太陽』(近代の雑誌)」とする。これまでの研究と対照するためである。また検索動作「副本文」を「副本文を検索対象に含む」に設定する。「あて字」の場合、二重に形態論情報が付与されている場合があり、「副本文」の方でヒットする場合があるからである。

その上で、近世のあて字を集め、明治初期に編纂された「あて字」の辞典である『魁本大字類苑』<sup>11)</sup>(以下『魁本』)を参照する。『日国』やCHJにおいて、用例が見られなかった場合でも、本書に掲載されていれば、近世においてある程度通用性を持った「あて字」であった可能性が見出せるからである。

さらに白話語彙との関連を視野に入れ、『唐話用例辞典』<sup>12)</sup>(以下『唐話』)も参照する。白話語彙については、どこまでを白話語彙として認定するか判断が難しいところがあるが、本稿においては『唐話』掲載の漢語を白話語彙であると判断する。

## 3、検証結果について(表凡例)

以上のように検証した結果をまとめたものが、表①～④である。表①～④は以下の基準によって

分類したものである。

- ①『日国』なし、**CHJ** なし
- ②『日国』なし、**CHJ** あり
- ③『日国』あり、**CHJ** なし
- ④『日国』あり、**CHJ** あり

なお表①については、紙面の関係上、一部の用例（今回の調査範囲内において、他に用例が確認できなかったもの）を別途記載している。検証結果については、以下のように表に記載した。

○「原文」は原文における漢字表記に対する振り仮名を括弧で示し、送り仮名なども示した。この漢字表記を用いて、「中納言」で書字形出現形検索を行った。また括弧内の振り仮名の語（活用や仮名遣いなどは適宜調整）を用いて、『日国』で検索を行った。

○「日国見出し漢字」はその語に対する『日国』における見出しの漢字表記である。

○「日国表記欄」に「振り仮名」に対する「漢字表記」が見られた場合は、その辞書名を挙げた。表記が完全に一致せず、極めて近い場合は、辞書名とともに漢字表記も挙げている。なお辞書名には以下の略称を用いた。

字…新撰字鏡、和…和名類聚抄、色…色葉字類抄、名…類聚名義抄、下…下学集、文…文明本節用集、伊…伊京集、明…明応五年本節用集、天…天正十八年本節用集、饅…饅頭屋本節用集、黒…黒本本節用集、易…易林本節用集、書…和漢音釈書言字考合類大節用集、へ…和英語林集成（再版）、言…言海

○「日国用例」は、用例において「漢字表記」が見られた場合に、一部参考として挙げた。なお「日国表記欄」に見られず、用例に見られた場合は必ず挙げている。

○「**CHJ**」は、洒落本、人情本、『太陽』の各コーパスの検索結果を示す。用例が見られた場合、それぞれ「洒」「人」「太」で示した。

○「魁本大字類苑」は、『魁本』における記載の有無を示す。見出し語として漢字表記が記載されている場合は「見」とし、漢字表記がない場合は「なし」とした。振り仮名で示された語自体の記載がない場合は「×」としている。割注に「漢字

表記」が示されている場合は「割（漢）」、「振り仮名」が示されている場合は「割（仮）」とした。その他必要に応じて括弧内に注を加えた。

○「唐話用例辞典」は、『唐話』における記載の有無を示す。見出し語として漢字表記が記載されており、なおかつ振り仮名も一致している用例が記載されている場合は「○」とし、漢字表記自体がない場合は「×」とした。なお漢字表記の記載があっても、振り仮名で示された語とは語釈が一致しないものは「振」、一部漢字表記が異なるものは「漢」として、括弧内に注を加えた。なお『雨月物語』以外の用例が記載されていなかった場合は「雨」としている。

○「テキスト」は出典を示す。なお今回は異なる作品に同じ「あて字」が出現した場合、それぞれの作品で挙げた。同一テキスト内で同じ「あて字」が複数回出現したものはまとめて一例だけ示した。

#### 4、グループ別の考察

表①～④で分類した各グループについて考察していきたい。

##### 4-1、①『日国』なし、**CHJ** なし

表①参照。『日国』の表記欄における記載も、同時代の洒落本、後の時代の人情本、『太陽』にも用例が認められなかった「あて字」となる。読本の間でのみ、使用されていた可能性が指摘できる。表①補遺に示した「あて字」については、『魁本』や『唐話』にも用例が見られず、特にその可能性が高い。これらが作者固有の「あて字」であるのか、あるいは読本というジャンルの中で通用していた「あて字」であるのかは、対象とする読本の範囲を広げて調査する必要がある。

このグループについては、使用される語彙自体が特殊なものであるということも考慮に入れる必要がある。「剪鷹（それたか）」（高尾）「開闢（はつぐに）」（雨月）など、単語そのものが他では見られないようなものが見受けられる。

『日国』の表記欄では見られずとも、語釈の用例で見られるものもある。ただ『雨月』の該当箇



所が用例として挙げられていることが多い。また「圓金（こばん）」（比翼）は『近世説美少年録』に、「山客（やまだち）」（比翼）は『南総里見八犬伝』にと、馬琴が他の読本で使用していたことも確認された。

山東京伝『忠臣水滸伝』に、「行装（たびよそほひ）」（比翼）の用例が見られるように、やはり読本間で通用していた「あて字」があったものと考えられる。そしてそれらは白話語彙由来であった可能性が高い。「行装（たびよそほひ）」の他にも「小断（こもの）」（高尾）「立地（たちどころ）」（比翼）「通与（わたし）」（比翼）などは、『唐話』の用例から『忠臣水滸伝』における使用が確認できる。実際に馬琴と京伝は白話語彙由来の同じ「あて字」を用いていたのである。元々は白話小説を翻訳する際に、白話語彙の意味の説明として「ある語」が「振り仮名」として用いられたが、読本を執筆する際に、今度は「ある語」を漢字表記する「あて字」として白話語彙が用いられたのではないだろうか。例えば「孩児」という白話語彙の説明として、「せがれ」と振り仮名が付けられる、あるいは唐話辞書類で「せがれの意」として説明される。そのことを知っている読本の作者が、今度は自身の作品において、「せがれ」という語を漢字表記する際に、「孩児」と「あて字」することがあったのではないかということである。<sup>13)</sup> このような白話語彙由来の「あて字」は、読本において「発生」したと言って良いであろう。ただ読本の間でしか用いられず、後世の作品へと「伝播」しない場合もあったのである。

ところで「往古（いにしへ）」「童子（わらは）」など、『雨月物語』には、『靈異記』『古事記』『日本書紀』『万葉集』など、上代資料に用例が見られるものがある。国学者でもあった秋成が、訓点資料から引用してきた可能性が考えられる。白話語彙だけではなく、訓点資料との関連性も視野に入れる必要があるのかもしれない。

その他「禿筆（きれふで）」（高尾）「消息（おとづれ）」（雨月）など、『日国』で近世近代の用例が見られたものは、『魁本』に記載されているものがあつた。これらの「あて字」は近世におい

てある程度の通用性があり、近代へと伝わっていったものと考えられる。

#### 4-2、②『日国』なし、CHJ あり

表②参照。『日国』の表記欄における記載はなかったが、洒落本、人情本、『太陽』のいずれかにおいて用例が認められた「あて字」となる。読本において「あて字」が発生し、それが後の時代へと伝播していった可能性が考えられるものである。

ただし『日国』に読本以前の用例が見られるものもある。「冷笑（あざわらい・ひ）」（高尾・比翼）などは談義本『教訓統下手談義』（1753）に既に用例が見られる。『魁本』における記載も確認されていることから、近世においてはある程度の通用性をもって用いられていた「あて字」であったことが考えられる。

「今夜（こよひ）」（雨月）「閨房（ねや）」（雨月）などは、表記欄では扱われていない辞書に用例が見られ、『魁本』にも記載されている。読本において発生したかどうかという点については、読本に先行する白話語彙との関連も含め、慎重に検討していかなければならない。

ただ読本が発生源であるかは別として、CHJにおいて洒落本では用例が確認されず、人情本、『太陽』において用例が確認されたものは、読本から人情本を経由してさらに近代へと伝播した可能性のある「あて字」であったことが考えられる。「霎時（しばし）」（雨月）「奴僕（しもべ）」（比翼）「忽地（たちまち）」（比翼）「平生（つね）」（雨月）「一個（ひとり）」（雨月）「午時（ひる）」（雨月）などがそれにあたる。

この内、「霎時（しばし）」は馬琴の読本『松浦佐用媛石魂録』に、「忽地（たちまち）」は『忠臣水滸伝』に用例があることが『唐話』に記載されており、読本において発生した白話語彙由来の「あて字」と言える。そのことが判明することにより、白話語彙→読本→人情本→近代といった、「あて字」の発生から伝播までの道筋を描き出すことができるのではないかと考えられる。

このように人情本の「あて字」のルーツとして読本を求めることができたが、近代における使用

に関しては、読本からの直接の影響であったことも考えられる。読本と近代作家については、坪内逍遙の『八犬伝』批判が知られるが、逆に言えば近代作家にとってそれだけ読本は身近な存在であったのである。

ところで洒落本は読本に先行するものもあり、「あて字」の影響関係について検証しておきたい。**CHJ**において洒落本に用例が見られたものについて、洒落本の初出年は以下の通りである。括弧内に「あて字」の洒落本における初出年を示している。

「光景（ありさま）」（比翼）（1822）、「性質（うまれつき）」（比翼）（1804）、「機関（からくり）」（高尾）（1822）、「花街（くるは）」（高尾）（1764）、「娼妓（けいせい）」（高尾）（1822）、「足下（そこ）」（比翼）（1800）、「閨房（ねや）」（雨月）（1800）、「両個（ふたり）」（雨月）（1822）、「不斗（ふと）」（高尾）（1807）、「漢土（もろこし）」（雨月・比翼）（1793）、「由縁（ゆゑ）」（雨月）（1804）

『雨月』（1776）『高尾』（1796）『比翼』（1804）であるので、洒落本の初出例と比較すると、読本が先行するか、おおよそ同年代ということになる。先行する洒落本から読本へ伝播したというよりも、当時戯作者たちの間で通用していた「あて字」とみなした方が良さそうである。山東京伝のように洒落本と読本の両方を手掛けていた戯作者の存在もある。また「光景（ありさま）」「娼妓（けいせい）」「両個（ふたり）」はいずれも鼻山人『花街鑑』（1822）の用例で、本作を人情本とする説もある。読本から人情本への伝播とみなすこともできるのである。

なお「光景（ありさま）」「機関（からくり）」は白話語彙由来の「あて字」であり、読本で発生したものとみなして良いであろう。

ただ「花街（くるは）」については、初出が1764年と、やや洒落本が先行しているように思われる。だが「花街（くるは）」の「花街」は『唐話』にも記載されている白話語彙であり、読本の嚆矢とされる都賀庭鐘『古今奇談 英草紙』（1749）における「花街（いろざと）」「花街（くるわ）」としての使用が初出であることが、張（2017）<sup>14)</sup>

において指摘されている。すなわち読本が先行しているのである。やはり白話語彙由来の「あて字」については、読本→洒落本と伝播していった可能性が考えられるのである。

#### 4-3、③『日国』あり、**CHJ**なし

表③参照。『日国』の表記欄における記載はあるが、同時代の洒落本、後の時代の人情本、『太陽』において用例が認められなかった「あて字」となる。

近世以前の古辞書、節用集において用例が見られるものについては、近世当時においてもある程度通用性も持った「あて字」として用いられていた可能性がある。洒落本、人情本、『太陽』における用例が見られないのは、単語自体があまり一般的な語ではなかったからであろうか。「窮鬼（いきすだま）」「地祇（くにづかみ）」「円座（わらうだ）」など、特に『雨月』には使用頻度が低いと思われる語が見られる。ただ「落魄（おちぶれ）て」「生長（ひとゝなり）て」「水滴（みづいれ）」（いずれも雨月）など、比較的使われそうな語も含まれる。

『日国』の用例を見ると、読本や辞書における使用が多いが、滑稽本や**CHJ**の人情本コーパスには含まれない人情本における使用も見られた。使用頻度は低いだが、近世においてはある程度通用性があったものと考えられる。またやはり時代の近い『和漢音釈書言字考合類大節用集』（1717、以下『書言』）<sup>15)</sup>に記載されている「あて字」が多かった。『書言』は節用集であり、いわゆる「字引き」であるが、語に対してあてられている漢字表記には、白話語彙が含まれることもある。馬琴は『書言』の記載から『八犬伝』の「八犬士」の着想を得たと言われており、「狡猾（あばれもの）」（高尾）「固辞（いなみ）がたく」（比翼）などは、白話語彙由来であるかは不明だが、『書言』由来の「あて字」であった可能性が高い。秋成も「説話（ものがたり）」（雨月）など『書言』由来の「あて字」を使用している。『書言』からの直接の引用であるかは定かではないが、『書言』で既に紹介されている「あて字」は、読本においてある



程度の通用性を持っていたものと考えられる。

『和英語林集成（再版）』（1872、以下『ヘボン』）『言海』（1889～91）が初出のものを除くと、『魁本』に掲載されている「あて字」も多く見られた。語自体が見られなかったものもあるが、それ以外は何らかの形で「あて字」の漢字表記が見られたものがほとんどである。古くから使用されていたが、あまり一般的ではなかった漢字表記が、読本で使用されることによって、一般に認知され、「あて字」として掲載されるに至ったものであろうか。この点については他の読本でも使用されていたのか別途調査が必要である。

#### 4-4、④『日国』あり、CHJ あり

表④参照。『日国』の表記欄における記載があり、同時代の洒落本、後の時代の人情本、『太陽』においても用例が認められた「あて字」となる。

常用漢字表には記載されていないが、「松明（たいまつ）」（高尾）「生業（なりはひ）」（雨月）「微笑（ほゝえみ）て」（比翼）など、現在も熟字訓として一般に通用しているものが含まれる。

読本以前の古辞書・節用集において用例が見られるものについては、読本において発生した「あて字」ではなく、伝統的に用いられてきた熟字訓のようなものであった可能性が考えられる。一方で、『ヘボン』・『言海』など、読本以降の辞書にしか見られない「臥房（ふしど）」（比翼）「活業（よわたり）」（比翼）などは、読本において発生し、伝播していった可能性を残す。

辞書欄の初出が『書言』のものについては、前述のように、読本がその影響を受けていた可能性がある。「呵々（から／＼）と」（比翼）「同胞（はらから）」（雨月・比翼）「只管（ひたすら）」（比翼）などの「あて字」は、『日国』においては『書言』が初出ということになるが、『書言』の本文ではそれぞれ『禅録』『白氏六帖』『太平記』と出典が記載されている。

『書言』は全ての用字に出典が示されている訳ではないので、あえて出典を示しているものの中には、当時において「あて字」であったものが含まれていると考えることもできる。これらは『書

言』に掲載され、読本を通じて世間に広く紹介され、後世へと伝播していった「あて字」だったのではないだろうか。なお「呵々（から／＼）と」「只管（ひたすら）」は、『唐話』にも記載があり、白話語彙由来であるが、やはり『書言』を通じて読本へと伝播したものであろうか。

②に比べて、洒落本や人情本のみという場合が少ないようである。人情本と『太陽』の両方を含むことが多く、やはり近世近代を通じてある程度の通用性を持っていた「あて字」であったと考えられる。特に読本以前の古辞書・節用集にも見られるものは、洒落本・人情本・『太陽』が揃っている場合もあり通用性が高かったものと考えられる。

③同様に、『魁本』における掲載も多かった。やはり近世においても通用性の高い「あて字」と認識されていたのであろう。「海士（あま）」（高尾）「生業（なりはひ）」（雨月）「黄泉（よみち）」（雨月）などは、一般的な表記として、あえて載せる必要はないと判断したものであろうか。ただ『魁本』には当時においても一般的であったと思われる表記が併記されていることもあり、何が一般的な表記であったのかということも考える必要がある。

#### 5、「あて字」と熟字訓について

表⑤参照。前回の調査においては、「あて字」が「通常表記」（『日国』の見出し漢字）と比べてどの程度用いられているのかを表にまとめ、「熟字訓」として用いられていた可能性を検証した（「あて字」と「通常表記」の用例数の比較、「あて字」が複数の作家に使用されているかなどによる）<sup>16)</sup>。⑤はその表から、今回の調査で読本に見られた「あて字」を抜粋し、再構築したものである。「分類」に「②『日国』なし、CHJ あり」「④『日国』あり、CHJ あり」のどちらに見られたかを挙げた（人情本に見られる「あて字」をベースとした調査であったので、必ず「CHJ あり」となる）。

「光景（ありさま）」「霎時（しばし）」「平生（つね）」「一個（ひとり）」「両個（ふたり）」は②に該当し、読本以前の用例が見られなかった「あ

て字」である。それが人情本や『太陽』においては、複数の作家によって使用されている。読本において発生したと考えられる「あて字」が、近世近代を通じて熟字訓のように用いられていた可能性が見い出せるのである。この内「光景（ありさま）」「霎時（しばし）」は白話語彙由来の「あて字」であり、読本において発生したことがほぼ確実視される。

「主人（あるじ）」「點頭（うなずく）」「深切（しんせつ）」「生業（なりわい）」は④に該当し、読本以前の古辞書・節用集に用例が見られる。この内、「深切（しんせつ）」については、現行とは少し異なる「深くはなはだしいこと」といった意味の語として載せられていたことも考えられる。ただ近世においては現行の意味の場合でも、「親切」よりも「深切」または「信切」の表記の方が一般的であった可能性がある。

読本に見られた現行の「生業（なりわい）」については、洒落本、人情本における使用が確認されていない。人情本においては「活業」が優勢であった。『雨月』では「作業」「産業」「生産」「農業」「農作」「農事」と用途に応じて様々な漢字表記がなされていた。これは極端な例としても、近世においては、固定的な表記を持っていなかったのかもしれない（『魁本』に「生業」がないのは掲載し切れなかったからか）。現行の「生業」は「生（な）る」の訓により、固定化したものであろう。

「主人（あるじ）」「點頭（うなずく）」については、用例の数からみても、近世近代においては熟字訓として用いられていた可能性が非常に高い。「點頭」については、こちらが通常表記であった（現行の「頷」よりも一般的であった）ことも考えられる。なお「點頭」は『新撰字鏡』（898～901頃）に記載があるが、『唐話』にも記載されている。白話語彙として日本に再輸入されたものと考えられる。これらは伝統的な「あて字」であったが、読本で用いられることにより、熟字訓として定着した可能性がある。

## 6、おわりに

以上のように見てきたが、読本に見られる「あて字」は、様々なタイプのものが混在していることがまずあった。白話語彙との関連が指摘されることの多い読本の「あて字」であるが、近世以前の古辞書・節用集に用例が見られるものもあった。また近世の『書言』の影響も考えられた（白話語彙由来の「あて字」が紹介されることもある）。

「①『日国』なし、**CHJ** なし」について、読本のみには見られなかった「あて字」も存在したが、『魁本』に記載が見られたものもあった。読本内で使用されたことにより、記載されるに至った可能性が考えられる。白話語彙由来の「あて字」が発生したが、他に伝播はせず、読本内で使用されたようであった。訓点資料由来の「あて字」については読本よりも遡れる可能性を残す。

「②『日国』なし、**CHJ** あり」については、読本で発生した「あて字」が洒落本、人情本、さらには近代へと伝播していった可能性が考えられた。白話語彙由来である「あて字」については、その発生から伝播への道筋を描き出すことができた。

「③『日国』あり、**CHJ** なし」について、近世以前の古辞書や節用集に見られるものは、伝統的な「あて字」であった可能性が考えられる。『書言』に見られるものは、近世に読本の間で広まり、『魁本』に掲載されたが、近代にまでは伝播しなかったものであろうか。

「④『日国』あり、**CHJ** あり」については、現代に通じる「あて字」も見られ、通用性が高かったものであると考えられる。ただどの程度一般的であったのかは、競合する漢字表記と比較して考える必要がある。特に『書言』が初出で、読本を通じて広まったと考えられる「あて字」については今後考えていきたい。

「⑤「あて字」と熟字訓について」では、人情本において熟字訓として用いられていた可能性のある「あて字」が、読本においても見られることが分かった。今後は異なる読本間において共通する「あて字」を見出し、それらが熟字訓のように伝播していったのかについても検証していきたい。

表①『日国』なし、CHJなし(抄)

原文	日国見出し漢字	日国用例	魁本大字類苑	唐話用例辞典	テキスト
連忙(あはたしく)	慌・遽	読本・雨月物語〔1776〕	×	○	雨月
慌忙(あはて)	慌・周章		×	○	雨月
往古(いにしへ)	古・往古	霊異記〔810～824〕	割(漢)	×	雨月
女弟(いもと)	妹		見	×	比翼
礼言(いやこと)	礼事	読本・春雨物語〔1808〕	×	×	雨月
紡績(うみつむぎ)	績紡	浄瑠璃・心中二つ腹帯〔1722〕	×	×	雨月
消息(おとづれ)	訪	自然と人生〔1900〕	見	×	雨月
面貌(おもて)	面		なし(オモダチ)	×	比翼
妖言(およつれごと)	妖言	日本書紀〔720〕(北野本訓)	×	×	雨月
栈橋(かけはし)	懸橋・梯	二人女房〔1891～92〕	なし	×	雨月
丫髻(かふろ)	髻		見	○	高尾
秃筆(きれふで)	切筆	洒落本・風俗七遊談〔1756〕	見	×	高尾
餅口(くちもらひ)て	口貰う	読本・雨月物語〔1776〕	×	漢(糊口)	雨月
展転(こいまろ)び	臥転	万葉集〔8C後〕	×	×	雨月
当時(このごろ)	此頃		なし	振(ただいま)・雨	雨月
圓金(こばん)	小判	読本・近世説美少年録〔1829～32〕	見	×	比翼
小厮(こもの)	小者	怪化百物語〔1875〕	見	○	高尾
自刃(じがい)	自害		見	×	比翼
院本(しばみ)	芝居		なし(シバキボン)	×	高尾
蒙汗(しびれ)	痺		なし	○(しびれぐすり)	高尾
蒙汗薬(しびれくすり)	痺薬	読本・忠臣水滸伝〔1799～1801〕	なし	○	高尾
家系(すぢめ)	筋目		なし(スヂ)	×	雨月
孩児(せがれ)	倅・倅		なし	○	比翼
漂客(だいじん)	大尽・大臣		なし(嫖客)	漢(嫖客)	高尾
立地(たちどころ)に	立所一	読本・南総里見八犬伝〔1814～42〕	×	○	比翼
計較(たばかり)つる	謀		×	振(はかりごと)・雨	雨月
起行(たびだち)	旅立		見	○	比翼
行客(たびと)	旅人		見	×	比翼
行客(たびと)を	旅人		見	×	比翼
行装(たびよそほひ)	旅装	読本・忠臣水滸伝〔1799～1801〕	なし(タビシタク)	○	比翼
適間(たま/＼)	偶・適・会		×	振(さきほど)	雨月
悪阻(つはりやみ)	悪阻病	浮世草子・世間旦那気質〔1773〕	なし(ツハリ)	×	比翼
外面(とのかた)	外の方	改正増補和英語林集成〔1886〕	×	×	比翼
朋友(ともがき)	友垣		なし(トモタチ)	×	雨月
媒氏(なかうど)	仲人・媒人		割(仮)	×	雨月
媒氏(なかだち)	仲立・中立・媒		見	×	雨月
過七(なぬか/＼)の	七日		なし(ナヌカ/＼ノトラヒ)	×	比翼
産業(なりはひ)	生業・家業	談義本・艶道通鑑〔1715〕	なし	×	雨月
行李(にもつ)	荷物	読本・雨月物語〔1776〕	見	○	雨月
落草(ぬすびと)	盗人		なし(ヌスピトナカマニイル)	○	雨月
簷下(のきば)	軒端		なし(ノキシタ)	×	比翼
祝部(はふり)	祝	日誌必用御布令字引〔1868〕	なし	×	雨月
主管(ばんとう)	番頭		なし	○	高尾
紙門(ふすま)	襖		なし(フスマシヤウジ)	×	比翼
古語(ふること)	古言・古語	日本書紀〔720〕(北野本訓)	なし	×	雨月
花子(まめぞう)	豆蔵		×	振(こじき)	高尾
御饗(みあへ)	御饗	古事記〔712〕	×	×	雨月
閑人(むだびと)	無駄人・徒人	読本・雨月物語〔1776〕	見	×	雨月
管待(もてな)し	持成		見	○	雨月
山客(やまだち)	山立	読本・南総里見八犬伝〔1814～42〕	なし	×	比翼
詰朝(よくてう)	翌朝		なし(ヨクアサ)	×	比翼
生計(よわたり)	世渡		なし(ヨワタリゴト)	×	比翼
通与(わたし)給はる	渡・済		見	○	比翼
過活(わたらひ)	渡・活	読本・雨月物語〔1776〕	なし	振(すぎわい)	雨月
絮煩(わづらはしき)	煩		なし	振(ながばなし)・雨	雨月
童子(わらは)	童	霊異記〔810～824〕	なし	×	雨月
童児(わらは)	童	万葉集〔8C後〕	なし	×	雨月
丫髻(わらは)	童		なし	振(めのわらは)・雨	雨月
任侠(をとこだて)	男伊達・男達		見	×	比翼
義弟(ぎていを・ヲト、ブン)	弟分		割(仮)	×	比翼



表②『日国』なし、CHJあり						
原文	日国見出し漢字	日国用例	CHJ	魁本大字類苑	唐話用例辞典	テキスト
冷笑(あざわらい)	嘲笑	談義本・教訓続下手談義〔1753〕	人太	見	×	高尾
冷笑(あざわらひ)て	嘲笑	談義本・教訓続下手談義〔1753〕	人太	見	×	比翼
光景(ありさま)	有様		洒人太	見	○	比翼
親族(うから)	親族	読本・雨月物語〔1776〕	人	×	×	雨月
疑念(うたかひ)も	疑		太	なし	×	雨月
裡面(うち)	内		太	見	×	比翼
俯向(うつぶし)	俯		人	なし	×	雨月
生質(うまれついで)	生付		人	なし(ウマレツキ)	×	高尾
性質(うまれつき)	生付		洒人太	なし	×	比翼
驕慢(おごり)	驕・奢		太	×	×	雨月
東西(おちこち)	遠近		太	なし	振(もの)	雨月
父子(おやこ)	親子		人太	×	×	雨月
母子(おやこ)	親子		人太	×	×	雨月
老爺(おやぢ)	親父・親仁	葉書〔1909〕	人太	なし	振(だんな)	高尾
戯房(がくや)	楽屋		人	見	×	高尾
魁首(かしら)	頭		太	見	×	比翼
唐土(から)	唐・韓・伽羅		人	×	×	高尾
機関(からくり)	絡繰・機関	人情本・英対暖語〔1838〕	洒太	見	○	高尾
花街(くるは)	郭・廓・曲輪		洒人	見	○	高尾
花街(くるわ)	郭・廓・曲輪		洒人	見	○	高尾
娼妓(けいせい)	傾城・契情		洒	見	×	高尾
今夜(こよひ)	今宵	名語記〔1275〕	人太	見	×	雨月
幸福(さいはひ)	幸		太	×	×	雨月
下物(さかな)	肴・魚		太	見	×	雨月
霎時(しばし)	暫一	読本・南総里見八犬伝〔1814~42〕	人太	なし(シバラク)	○	雨月
奴僕(しもべ)	下部・僕		人太	見	×	比翼
過世(すくせ)	宿世	読本・椿説弓張月〔1807~11〕	人	×	×	比翼
足下(そこ)	其処・其所・其	沓手鳥孤城落月〔1897〕	洒	×	×	比翼
知縣(だいくわん)	代官		人	なし	×	高尾
忽地(たちまち)	忽・乍・		人太	なし	○	比翼
女騰(ぢようろう)	女郎	浮世草子・色里三所世帯〔1688〕	太	なし	×	雨月
平生(つね)	常・恒		人太	×	振(つねづね)	雨月
離宮(とつみや)	外宮	読本・雨月物語〔1776〕	太	×	×	雨月
主殿(とのも)	主殿		太	見(主殿寮トモノレウ)	×	雨月
純子(どんす)	緞子		人	なし	×	比翼
閨房(ねや)	閨・寝屋	韻字集〔1104~10〕	洒人	見	×	雨月
兄弟(はらから)	同胞	万葉集〔8C後〕	人	見	×	雨月
光明(ひかり)	光		太	×	×	比翼
只願(ひたすら)	只管・一向	読本・南総里見八犬伝〔1814~42〕	人	見	○	比翼
一個(ひとり)	一人・独		人太	×	×	雨月
午後(ひる)	昼・午		太	なし	×	雨月
午時(ひる)	昼・午		人太	なし	×	雨月
兩個(ふたり)	二人		洒人太	×	×	比翼
不斗(ふと)	なし		洒人	×	×	高尾
稜威(みいつ)	御蔽・御稜威	読本・雨月物語〔1776〕	太	×	×	雨月
貞操(みさほ)	操	読本・雨月物語〔1776〕	人	なし	×	雨月
女兒(むすめ)	娘		人	なし	×	比翼
漢土(もろこし)	唐土・唐		洒人	×	×	雨月
漢土(もろこし)	唐土・唐		洒人	×	×	比翼
動静(やうす)	様子・容子		人	なし	○	雨月
準備(やうみ)	用意		人	見(ヨウイ)	○	比翼
由縁(ゆゑ)	故	読本・雨月物語〔1776〕	洒	なし	×	雨月
蘇生(よみかへり)給ふ	蘇・甦	日本書紀〔720〕(前田本訓)	人太	なし	×	雨月
蘇生(よみがへり)の	蘇・甦	水彩画家〔1904〕	人太	×	×	雨月
俠者(をとこだて)	男伊達・男達		人	見	×	比翼

表③『日国』あり、CHJなし						
原文	日国見出し漢字	日国表記欄	日国用例	魁本大字類苑	唐話用例辞典	テキスト
商賈(あきびと)	商人	和色	読本・雨月物語〔1776〕	なし(アキンド)	×	雨月
求食(あさり)けり	漁	下文伊饒易書		×	×	比翼
東國(あづま)	東・吾妻	言		×	×	比翼
唯妍(あてはか)に	なし	書		×	×	比翼
狡猾(あばれもの)	暴者	書		なし	×	高尾
泉邸(あま)	海人・海士・海女・蜃	和色		なし	×	雨月
曠野(あらの)	荒野・曠野	易	伊呂波字類抄(鎌倉)	×	×	雨月
荒磯(ありそ)	荒磯	言		×	×	雨月
窮鬼(いきすだま)	生霊・窮鬼	和色名易書		見	×	雨月
漁火(いさりび)	漁火	書へ言		見	×	雨月
固辞(いなみ)がたく	辞・否	書		見	×	比翼
末期(いまは)	今際	へ		×	×	雨月
荊棘(うばら)	茨	【荊棘】書		なし	×	雨月
續麻(うみそ)	續麻	言	読本・雨月物語〔1776〕	×	×	雨月
贈名(おくりな)	贈名・謚・謚	書	読本・雨月物語〔1776〕	なし	×	雨月
落魄(おちふれ)て	落一	色名文伊饒易書へ		見	×	雨月
大虚(おほぞら)	大空・大虚	言	読本・雨月物語〔1776〕	割(漢)	×	雨月
御膳(おももの)	御物	書		見	×	雨月
挿頭(かざし)	挿頭	【挿頭】言【挿頭花】和色易	あゆひ抄〔1773〕	なし(挿頭花)	×	雨月
菓子(くだもの)	果物	名	名語記〔1275〕	なし(菓子)	×	雨月
地紙(くにつがみ)	国神	和書へ言		見	×	雨月
茱萸(くみ)	胡頹子・茱萸	伊明天饒黒書言		見	×	雨月
蕎麦(くろむぎ)	黒麦	和色名	読本・雨月物語〔1776〕	見	×	雨月
樹神(こたま)	木霊・木魂・樹	和色名文伊明天饒黒易書		見	×	雨月
大小(さばかり)	然一	書		×	×	雨月
潜然(さめ／＼)と	なし	へ		×	×	雨月
倭文(しづり)	倭文	言	読本・雨月物語〔1776〕	×	×	雨月
質朴(すなほ)	素直	色伊易書		見	×	雨月
季子(すゑのこ)	末の子	書		見	×	雨月
高杯(たかつき)	高杯	色易書言		なし	×	雨月
席薦(たゝみ)	畳	書		見	×	比翼
旅客(たびひと)	旅人	和書		なし	×	雨月
霖雨(ながあめ)	長雨・霖	書	滑稽本・大千世界衆屋探〔1817〕	なし	×	高尾
無礼(なめけ)なれ	無礼一	書へ		×	×	雨月
日和(には)	日和	書	仮名草子・悔草〔1647〕	×	×	雨月
霹靂(はた／＼がみ)	霹靂神	書へ言	読本・雨月物語〔1776〕	見	×	雨月
瀾然(はら／＼)と	なし	書		×	×	比翼
日来(ひごろ)	日頃・日比・日来	名文伊明天饒黒易書へ		見	×	雨月
生長(ひと／＼なり)て	人と成なる	伊饒易書		×	×	雨月
臥所(ふしど)	臥所	言		×	×	雨月
半月(ふたなり)	二形・二成	書		なし	×	比翼
物忽(ぶつそう)	物・物騒(サウ)	文		×	×	比翼
行跡(ふるまひ)	振舞	【行迹】書	太平記〔14C後〕	見	×	雨月
船先(へさき)	船先・船・艦	言		なし	×	高尾
蟲物(まじもの)	蟲物	言	延喜式〔927〕(出雲板訓)	×	×	雨月
奉仕(まつろへ)しめ給ふ	服・順	書		×	×	雨月
目睡(まどろみ)ぬ	微睡	書		×	×	比翼
水滴(みついれ)	水入	文伊明天饒黒易書へ		見	×	高尾
乳母(めのと)	乳母・傅	和色名文伊明天饒黒易書へ言		見	×	雨月
從來(もとより)	元一・固一・素一	伊易書言		なし(モトカラ異)	×	雨月
説話(ものがたり)を	物語	書		見	○	雨月
黄葉(もみじ)	紅葉・黄葉・栂	色書言		なし	×	雨月
墨斗(やたて)	矢立	へ	人情本・清談若縁〔19C中〕	見	×	高尾
矢場(やには)に	なし	言		なし	×	比翼
海若(わたづみ)	なし	色	読本・雨月物語〔1776〕	なし(ワダツカミ)	×	雨月
円座(わらうだ)	なし	和色書		見	×	雨月
膝行(あざり)よりて	膝行・蹠	色文伊饒黒書言		見	×	雨月

表④『日国』あり、CHJあり							
原文	日国見出し漢字	日国表記欄	日国用例	CHJ	魁本大字類苑	唐話用例辞典	テキスト
相圖(あいづ)	合図・相図	下文伊明鏡黒易書へ言		酒人	×	×	高尾
白地(あからさま)に	なし	色名下伊天鏡黒書		人太	見	振(あきち)	比翼
商人(あきんど)	商人	文明鏡黒書へ言		酒人太	なし	×	高尾
朝食(あさけ)	朝食・朝餉	鏡書言		太	×	×	雨月
海士(あま)	海人・海士・海女・蜃	天鏡易書		太	なし	×	高尾
海人(あま)	海人・海士・海女・蜃	色名下書言	十巻本和名類聚抄(934頃)	太	見	×	雨月
許多(あまた)	数多	言	滑稽本・麻疹戯言(1803)	酒太	×	×	比翼
主人(あるじ)	主	名書へ	自然と人生(1900)	人太	見	×	比翼
日外(いつぞや)	何時一	書へ言	浮世草子・好色一代男(1682)	人太	見	×	比翼
大人(うし)	大人・卿	言	読本・雨月物語(1776)	人	×	×	雨月
羽團扇(はうちわ)	团扇・团	和色名下文伊明鏡黒易書へ言		人太	見	×	比翼
点頭(うなづき)て	頷	字伊易書へ	滑稽本・麻疹戯言(1803)	酒人太	見	○	雨月
采女(うねめ)	うねめ	色鏡書へ言		太	×	×(ウネメノツカサ采女司)	雨月
覺束(おぼつか)なく	覺束一	【無覺束】下文伊明天鏡書へ言		人太	なし	×	比翼
記念(かたみ)	形見	書へ	俳諧・奥の細道(1693~94頃)	人太	見	○	高尾
土器(かはらけ)	土器	文伊明天鏡黒易書へ言		人太	なし	×	雨月
呵々(から／＼)と	なし	書へ		太	×	×(カラカラ／＼ワラフ)	比翼
煙管(きせる)	煙管	【煙管】言	当世書生気質(1885~86)	酒人太	見	×	高尾
種々(くさ／＼)	種種	色へ言		太	×	×	雨月
医師(くすし)	薬師	文明天鏡黒易書		太	見	×	比翼
去年(こぞ)	なし	色名易書へ言		酒人太	×	×	雨月
今茲(ことし)	今年	色文		人	なし	×	比翼
琴柱(ことち)	琴柱・箏柱	言	室町殿物語(1706)	太	なし	×	高尾
冊子(さうし)	草紙・草子・冊子・双紙	書		酒人	×	×	比翼
種々(さま／＼)	様様	文伊天		太	見	×	雨月
神稿(したかき)	下書・下描	【検子・草案・草稿】書	隨筆・北越雪譜(1836~42)	人	なし	×	高尾
深切(しんせつ)	親切・深切	書へ言	酒落本・傾城賀二筋道(1798)	酒人太	×	×	高尾
角力(すまふ)	相撲・角力	書言	滑稽本・浮世床(1813~23)	酒太	なし(スマフトリ角力人)	×	高尾
松明(たいまつ)	松明	色下文伊天易言		太	見	×	高尾
瀑布(たき)	滝	天書	なし	太	見	×	高尾
黄昏(たそかれ)	黄昏	へ言		人太	見	×	雨月
假令(たとひ)	仮令・縦・縦使	色名文黒易書へ言		太	見	×	比翼
玉章(たまづさ)	玉梓・玉章	文伊明天鏡黒易書へ言		酒人太	見	×	高尾
近来(ちかごろ)	近頃・近比	文伊明天鏡黒書		人太	見	×	雨月
左右(とかう)	なし	書言		人太	×	×	比翼
左右(とかく)	兎角・左右	言	多情多恨(1896)	人太	×	振(とにかくに)・雨	雨月
兎角(とかく)	兎角・左右	言		酒人太	×	×	高尾
刀自(とじ)	刀自	書言		太	見	×	雨月
年来(としごろ)	年頃・年比	名易書へ		人太	×	×	雨月
就中(なかんづく)	就中	色名へ言		太	×	×	雨月
就中(なかんづく)	就中	色名へ言		太	×	×	比翼
余波(なごり)	名残・余波	伊明天鏡黒易書へ言		太	なし	×	比翼
直衣(なほし)	直衣	明易書へ言		太	×	×	雨月
生業(なりはひ)	生業・家業	言		太	なし	×	雨月
刷毛(はけ)	刷毛・刷子	易書へ言		太	なし	×	高尾
婢女(はしため)	端女・婢女	へ	桐の花(1913)	人太	×	×(ハンタ)	雨月
同胞(はらから)	同胞	書言		人太	見	×	雨月
同胞(はらから)	同胞	書言		人太	見	×	比翼
只管(ひたすら)	只管・一向	書へ言	人情本・清談若縁(19C中)	酒人太	見	○	比翼
一條(ひとすぢ)	一筋・一条	書	珊瑚集(1913)	太	見	×	比翼
成長(ひととなり)し	人と成る	色		人	×	×	雨月
臥房(ふしど)に	臥所	へ		人太	×	×	比翼
故郷(ふるさと)	故里・故郷	文書	万葉集(8C後)	人太	見(異)	×	比翼
杜鵑(ほとゝぎす)	杜鵑・時鳥・子規・郭公	下伊鏡易書		太	見	×	比翼
微笑(ほゝえみ)て	微笑・頰笑	へ言		太	見	×	比翼
賣僧(まいず)	売僧	易書へ言		太	×	×(マイスバウズ)	高尾
丈夫(ますらを)	益荒男・丈夫・大夫	和名書へ言		人太	見	振(おっと)	雨月
皇子(みこ)	御子・皇子・皇女	名へ言		太	×	×	雨月
往昔(むかし)	昔	名		人太	なし	×	比翼
黙止(もだし)がたく	黙・黙止	文鏡黒易書へ		人	×	×	比翼
元來(もとより)	元一・固一・素一	色名天鏡易書		酒人太	×	×	比翼
武士(ものゝぶ)	物部・武士	文易書へ言		人太	×	×	雨月
唐土(もうごし)	唐土・唐	書へ言	浄瑠璃・蘆屋道満大内鑑(1734)	酒人太	×	×	雨月
温泉(ゆ)	湯	和色易		太	見	×	雨月
黄泉(よみち)	黄泉・黄泉路	書言		人	なし	×	雨月
終夜(よもすがら)	通夜・竟夜	色文明天鏡黒易書へ言		酒人太	見	×	雨月
活業(よわたり)	世渡	へ言		人太	なし	×	比翼
俳優(わざおき)	俳優	書言	日本書紀(720)(鴨脚本訓)	人	見(ワザアキ)	×	比翼
萱草(わすれぐさ)	忘草・忘種・萱草	和色下文鏡黒易書		人太	見	×	雨月
時々(をり／＼)	折折	【時時】書言		太	見	×	雨月
大蛇(をろち)	大蛇	言		太	見	×	雨月



表⑤「あて字」と熟字訓について															
振り仮名	漢字表記	分類	人情本作品数	種別	語と認定できる振り仮名あり					振り仮名なし（参考値）					全体数
					全体数	洒落本	人情本	太陽	太陽作家数	振り仮名なし	解析	酒（解）	人（解）	太（解）	
ありさま	光景	②	3	あて字	15	2	3	10	8	185	0	0	0	0	345
	有様		日国見出し	通常	132	0	1	131	日国見出し	950	949	1	0	948	1087
あるじ	主人	④	7	あて字	102	2	23	77	27	491	1	0	0	1	859
	主		日国見出し	通常	31	2	17	12	日国見出し	1637	38	13	23	2	1992
うなずく	點頭	④	3	あて字	50	1	5	44	26	8	2	0	0	2	62
	頷		日国見出し	通常	67	0	0	67	日国見出し	22	22	0	0	22	90
しばし	霎時	②	3	あて字	23	0	15	8	7	2	2	0	0	2	27
	暫		日国見出し	通常	42	7	6	29	日国見出し	35	21	1	0	20	84
しんせつ	信切		7	あて字	79	0	58	21	7	10	10	0	0	10	89
	深切	④	日国見出し・6	あて字	53	3	40	10	6	8	8	0	0	8	61
つね	親切		日国見出し	通常	84	0	0	84	日国見出し	214	214	0	0	214	298
	平生	②	3	あて字	10	0	8	2	2	328	0	0	0	0	439
なりわい	常		日国見出し	通常	391	10	38	343	日国見出し	2438	2433	2	1	2430	2848
	恒		日国見出し	通常	2	0	0	2	日国見出し	129	110	0	0	110	131
ひとり	活業		4	あて字	7	0	6	1	1	0	0	0	0	0	43
	生業	④	日国見出し	通常	1	0	0	1	日国見出し	28	0	0	0	0	34
ふたり	家業		日国見出し	通常	3	1	2	0	日国見出し	15	0	0	0	0	39
	一個	②	4	あて字	25	0	11	14	6	2	1	0	0	1	30
ふたり	一人		日国見出し	通常	1176	10	75	1091	日国見出し	1655	1652	27	21	1604	3185
	兩個	②	4	あて字	55	1	32	22	3	3	1	0	0	1	59
	二人		日国見出し	通常	1091	14	170	907	日国見出し	711	711	59	45	607	1886

表①補遺 『日国』なし、CHJなし（表に掲載できなかった「あて字」）
『雨月』呆自（あきれ）て、網子（あご）、鮮魚（あさらけき）、遊躍（あそび）を、妓女（あそびもの）、遊躍（あそぶ）、愛憐（あはれみ）、海郎（あま）、再三（あまたゝび）、莊主（あるじ）、饗応（あるじぶり）、破屋（あれや）、紺染（あそめ）、敵敷（いかめしく）、士卒（いくさ）、軍将（いくさぎみ）、軍民（いくさひと）、五句（いそじ）、介抱（いたはり）、行幸（いでまし）、辺鄙（いなか）、家眷（いへのこ）、人居（いへみ）、季女（いもうと）、容色（いろめ）、妓女（うかれめ）、瘟疫（えやみ）、大灣（おほわだ）、当罪（おもてつみ）、舅姑（おや／＼）、黒影（かげろひ）、鱸手（かしはびと）、陰風（かぜ）、容姿（かたち）、話柄（かたりぐさ）、偏固（かたわ）なる、羸目（かついろ）、薜蘿（かづら）、巨魁（かみ）、崩御（かみがくれ）、草屋（かやのや）、辛勞（からう）じて、神主（かんざね）、巫子（かんなぎ）、来朝（きむか）ふ、下向（くだり）て、社稷（くに）、細妙（くはし）からぬ、細妙（くはしき）、痛楚（くるしむ）、重陽（こゝぬか）、心神（こゝろ）、世挙（こぞ）りて、茲年（ことし）、他人（ことひと）、婚儀（ことぶき）、寿命（ことぶき）、兄長（このかみ）、烈婦（さかしめ）、前生（さきのよ）、産所（さと）、布班（しきなら）べ、恋慕（しの）ばざる、聘礼（しるし）、領所（しるところ）、不慮（すゝろ）に、簞子（すのこ）、下旬（すゑつかた）、杳冥（そら）、家財（たから）、財寶（たから）、東南（たつみ）、輕靡（たなびく）、調練（たなら）す、習練（たならす）、軍配（たばかり）、計策（たばかり）、長嘘（ためいき）、虚弱（たよはき）、盟約（ちかひ）すでに、燕子（つばくら）、蘭若（てら）、座上（とこのべ）、長談（ながものがたり）、陰魂（なきたま）、作業（なりはひ）、生産（なりはひ）、農業（なりはひ）、農作（なりはひ）、農事（なりはひ）、脱去（ぬきすて）て、子孫（のち）、計較（はかり）なん、智謀（はかりこと）、用意（はかりこと）、開闢（はつぐに）、一旦（ひとたび）、生長（ひととなり）、一宿（ひとよ）、独自（ひとり）、平杯（ひらつき）、閨房（ふしど）、行儀（ふるまひ）、行止（ふるまひ）、狂言（まがこと）、志誠（まごころ）、沙石（まさご）、国政（まつりごと）、俎盤（まないた）、咫尺（まのあたり）、御座（みくら）、宝祚（みくらゐ）、鬱悒（みこころ）、歡趣（みこころ）、身褻（みそぎ）、太虚（みそら）、靈廟（みたまや）、從駕（みとも）、從者（みとも）、都風（みやび）たる、秀麗（みやびやか）なる、向岳（むかつを）、佳婿（むこがね）、閑談（むだこと）、心頭（むね）、慈愛（めぐみ）、海愛（めづ）らしく、鬼化（ものゝけ）、妖怪（ものゝけ）、妖災（ものゝけ）、武士（ものゝべ）、辰旦（もろこし）、一属（やから）、氏族（やから）、倍臣（やつこ）、罷事（やんごと）なく、世説（よがたり）、由縁（よし）、旧交（よし）、天年（よはひ）、宝算（よはひ）、命数（よはひ）、総角（わかき）より、俳諧（わざごと）、家童（わらべ）、疫病（ゑやみ）、雄氣（をとこさび）、娘子（をとめ）、終焉（をはり）
『高尾』追人（おつて）、驚轉（ぎやうてん）、柳巷（くるわ）、偏提（さゝへ）、颯々（さつ）と、戲文（しばゐ）、翦鷹（それたか）、小説（たうほん）、知縣（ちとう）、牒番（てうつかひ）、捕人（とりて）、龍火（はなび）、怪船（はやふね）、伴頭（ばんとう）、賤官（ひかん）、戲廂（ぶたい）、賞錢（ほうひ）、洞坑（ほらあな）、閱者（みんひと）、令子（むすこ）、企叛（むほん）、馬圍（むまかた）、名木（めいかう）、稗説（ものがたり）に、眷頭（やはら）、眷頭（やわら）、別腹（わきはら）、時災（わざはひ）
『比翼』剛勢（いきほひ）、鶏明（いなめ）、妓女（うかれめ）、售竭（うりつく）して、追人（おつて）、家信（おとづれ）、凶音（おとづれ）、小弟（おとゝ）、假托（かこつけ）つ、仇人（かたき）、蜘蛛（かたつふり）、懷包（かみいれ）、金瘡（きず）、刀尖（きつさき）、湯刺（くすり）、朽惜（くちをし）さ、嫖院（くるわ）、鋸法（けんじゆつ）、剛盜（ごうとう）、備細（ここのよし）、足下（ごへん）、後身（さいらい）、花院（さと）、係嗣（しそん）、少刻（しばらく）、後面（しりへ）、身文（せたけ）、黄金（たから）、貯録（たくはへ）、委巷（ちまた）、守節雉（つまこぶきじ）、此地（ところ）、亡殻（なきがら）、鮮血（のり）、本末（はじめをはり）、艶簡（ふみ）、回簡（へんじ）、浮屠（ふと・ホウシ）、啓行（ほつそく）、梵論（ぼろぼろ）に、貞実（まめやか）に、路傍（みちのべ）、実檢（みとゞけ）、京洛（みやこ）、雌鳥（めす）、災害（わざはひ）、殃危（わさわひ）、雄鳥（をす）

今回の調査を通じて、読本において発生した「あて字」には白話語彙由来のものがあること、そしてそれらが洒落本、人情本といった近世の戯作、さらには近代へと伝播していったこと、またそれらの「あて字」の中には熟字訓のように使用されていたものがあることを明らかにできたかと思う。ただ白話語彙の判定には『唐話』のみを用いたため、不十分なところがあったかもしれない。今後は唐話辞書類から直接「あて字」を採取することも行っていきたい。また今回取り上げた読本の「あて字」はごくわずかであったので、さらに範囲を広げて読本から「あて字」の用例を採取し、読本内における通用性についても検証していきたい。

## 注

- 1) 「あて字」の定義については、木村義之 (2005) 「あて字」『朝倉漢字講座1』朝倉書店、笹原宏之 (2010) 『当て字・当て読み漢字表現辞典』三省堂、田島優 (2017) 『「あて字」の日本語史』風媒社などに詳しい。本稿において扱う「あて字」については、「2、検証方法について」で示した。
- 2) 口頭発表「近世近代における『あて字』と熟字訓 一人情本の漢字表記を中心に―」(「通時コーパス」シンポジウム2020オンライン)
- 3) 熟字訓は本来漢語を字訓の範囲外の和語で読むことを指すが、本発表では漢語を別の漢語で読むことも含む(「家業(しょうばい)」など)。また漢語の「読み方」の問題のみではなく、漢字の「あて方」の問題としても扱う。
- 4) 矢野準 (1987) 「人情本の漢字」『近世の漢字とことば(漢字講座7)』(明治書院)において、人情本の漢字使用について、「一部分には読本類との交流をうかがわせる点がある。」(p215)との指摘がある。
- 5) オンライン版を使用。なお『日国』の用例および表記欄からの引用は出典を省略した。これらの出典は『日国』の「主要出典一覧」「辞書略称一覧」に基づく。  
<https://japanknowledge.com/library/>
- 6) 白話語彙の定義は難しいが、本稿では『三国志演義』『水滸伝』などの中国近世口語小説が、日本で翻訳されたり、読本として翻案されたりすることにより、戯作に広まった新しい漢語のことを指す。
- 7) 鈴木丹士郎 (1987) 「読本の漢字」『近世の漢字とことば(漢字講座7)』など。
- 8) 以下の電子テキストをベースに用い、以下の底本と対照した(電子テキスト及び底本の電子画像は、2021年7月15日閲覧)。  
『雨月物語』  
電子テキスト 木越研究室 上田全集07巻\_雨月物語 (ルビあり)  
<https://docs.google.com/document/pub?id=1ZF6rX5odM6NmKto3GqkLEhSBfAPvBObIAcpF1wOAK3E>  
底本 『雨月物語一影印一』おうふう  
『高尾船千字文』  
電子テキスト 高木元『高尾船千字文』一解題と翻刻―  
<https://fumikura.net/text/senjimon.html>  
底本 早稲田大学図書館蔵本 請求記号 へ13 01246  
[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13\\_01246](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_01246)  
『小説比翼文』  
電子テキスト 高木元『小説比翼文』(曲亭馬琴・享和四年刊)  
<https://fumikura.net/text/hiyokumon.html>  
底本 国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8942894>
- 9) 常用漢字表掲載の熟字訓については、田島優 (2019) 『あて字の素姓一常用漢字表「付表」の辞典』(風媒社)に詳しいため、今回は調査対象外とした。
- 10) 今回の調査で使用した CHJ のバージョンは以下の通りである。  
国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』  
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share>  
(Ver.1.0)  
国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス

江戸時代編Ⅱ人情本』

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo>  
(Ver.0.8)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス  
明治・大正編Ⅰ雑誌』 (短単位データ 1. 2)

[https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#zasshi](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi)

- 11) 杉本つとむ解説 (1994) 『魁本大字類苑—江戸時代を読むあて字大辞典』 雄山閣
- 12) 小田切文洋 (2008) 『江戸明治 唐話用例辞典』 笠間書院
- 13) 表①「義弟 (ぎていを・ヲト、ブン)」および表①補遺「浮屠 (ふと・ハウシ)」については、いわゆる左ルビを「あて字」とみなして掲載したが、正確にはこれらは「あて字」ではなく、まだ「漢語の意味説明」の段階であったものと考えられる。左ルビではなく、右ルビ (音読のための振り仮名) として用いられるようになって初めて「あて字」の発生と言えよう。
- 14) 張海燕 (2017) 『「古今奇談 英草紙」と白話語彙』 (pp.114-116) 勉誠出版
- 15) 中田祝夫・小林祥次郎 (2006) 『改訂新版 書言字考節用集研究並びに総索引』 勉誠出版
- 16) 振り仮名によって、「あて字」か「通常表記」かを判断し、用例数の比較を行った。「あて字」であっても、ある程度の用例数があったり、複数の作家によって使用されていたりすれば、熟字訓のように用いられていた可能性がある。さらに用例数が「あて字」>「通常表記」であれば、「あて字」の方が、当時一般的な表記であったことまで考えられるのである。

## 要旨

本稿においては、人情本において見られた「あて字」のルーツを読本に求め、上田秋成と曲亭馬琴の読本に見られる「あて字」の中に、人情本や近代へと伝播していったものがあるか、日本語歴史コーパスを用いて調査を行った。

またそれらの「あて字」が、読本において発生したものであったのか、『日本国語大辞典』を用いて、読本以前の用例が見られるか調査を行った。

その結果、読本以前の古辞書類には見られず、近世の洒落本や人情本、近代の雑誌『太陽』に見られる「あて字」が確かに存在した。特に白話語彙由来の「あて字」は、読本において発生した可能性が高い。また中には熟字訓のように用いられていたと考えられる「あて字」もあった。

【謝辞】本稿は平成30年度日本学術振興会学術研究助成基金助成金若手研究「近世日本語における「あて字」の発生と近代日本語への伝播」(課題番号18K12406)の研究成果の一部です。

※本稿の内容はポスター発表「読本にみられる『あて字』の伝播について」(「通時コーパス」シンポジウム2022)に基づいています。

(2022年9月7日受稿)